

複数作品の比べ読みを通して 生徒の読みを深める高校古典の授業実践

M17EP010
保坂加奈子

1. 問題と目的

(1) 背景

①「自分の思いや考えを広げたり深めたりする」ことを目標とする古典の学習

H28 中央教育審議会答申では、高校国語科において「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向がある」こと、また「古典学習への生徒の関心・意欲の低下」が指摘されている。「幼稚園、小学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(中教審第 197 号))

こうした課題に対し、文部科学省では、新指導要領において、育成を目指す資質・能力を明確にした「教育内容の主な改善事項」の一つとして「伝統や文化に関する教育の充実」を挙げ、さらに国語科に対して「言語文化に対する理解を深める学習の充実」を求めている(「高等学校学習指導要領解説国語編」(平成 30 年 3 月告示)及び解説)。特に新科目「古典探求」は、古典を学習対象とし、「伝統的な言語文化に関する理解」をより深める科目であり、「先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で(中略)自分の思いや考えを広げたり深めたり」できるようになることを目標としている。そのためには、古典の豊かな世界に触れ、様々なものの見方、感じ方、考え方に、「主体的に関わる」ことを通じて、「思考力や想像力を伸ばし、豊かな感性や情緒をはぐくむこと」が必要になってくる(高等学校学習指導要領解説)。

②「比べ読み」授業への期待

こうした中、様々な文章を読み比べる「比べ読み」は、「主体的な読み手」を育て、古典作品の特徴を捉えやすくし、作品認識や作品評価をより深めていくものと、筆者は考えている。

「比べ読み」の先行研究では、義務教育課程での実践が比較的多く、船津(2010)は、「共通点と相違点を把握し、客観的・分析的に批評できる」と述べている。さらに最近は高校古典でも実践が増え、「多面的に捉える力」や「本文を関連付け情報を精査して事実を読み取る力」を育成するものとされている(沖 2018)。

現行指導要領においても、「国語総合 C 読むこと」の言語活動例に「エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること」と明記されている。また新学習指導要領では、新科目「言語文化」の「3 内容〔思考力、判断力、表現力等〕B 読むこと」の指導事項に、「エ 作品や分掌の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること」とされ、対象の作品と関係のある他の作品を読みながら内容解釈を深める資質・能力を身に付けることが定められた。さらに言語活動例にも、「(2)ウ 異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。」とあり、「古典探求」においても「(2)イ 同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。」が挙げ

られている。

③ 高校古典における「比べ読み」の意義

今見てきたとおり、「比べ読み」授業は比較し分析・整理をすることにより、より高次のものへの気づきが増え、思考力や判断力を育成できるという魅力がある。

また現代の生徒たちにとって、古典世界は自分の生活経験からかなり遠い。そして読むための知識(語彙や文法)等も少ない状態で作品を読まねばならない。つまり古典作品や古典の世界を、生徒たちが自分や社会と関わらせて考えることは難しい。だから古典こそ「比べ読み」を取り入れて「比べる土台」を持つことで、客観的・分析的に読むことができ、仲間と議論しやすくなり、その中で、作品の場面がより具体的になっていくと思われる。そもそも古典作品を読むことにおいて重要なのは、この作品の場面・内容をより具体的にイメージできるようになっていくことである。そして、自らの解釈が始めよりも深まっていき、表面的には書かれていないような作品の底流にある思想や感情に気づいたり、作品認識や作品評価を深めていったりするようになる。それはすなわち、生徒たちが自然に、我が国の伝統的な言語文化への理解を捉えていくことにつながっていく。このように、古典授業における「比べ読み」は、古典作品の読みを深めていくのに有効な方法であると筆者は考えている。

④ 古典学習における「比べ読み」の課題

一方、「比べ読み」に対する課題として、単独作品の読みの解釈も十分とはいえない場合も多いなか、二作品を同時に読むことができるのかという意見や、二作品読むことで、時間が余計にかかったり、生徒たちが消化不良に陥ったりするのではないかという意見がある。そしてそもそも、どの作品を比べる教材として選び、何を比べさせればいいのかという声も聞く。

しかし、そうした課題の数々をなるべく解消しつつ、かつ「比べ読み」をしたからこそ、読みが深まりやすくなるという成果が得られれば、この授業を単元の中に取り入れる価値はあると思う。

そこで今回は、「比べ読み」授業で、いったいどのように読みを深めていけばいいのか考えていきたい。比べる作品があったからこそ見えてきたものを活用し、読みが深まるか明らかにしていきたい。またそのとき、授業者としてはどのような学習の手立てが必要になってくるだろうか。教材選びから授業形態、言語活動など、昨年度の成果をもとに、考えて実践していきたい。

(2) 目的

古典学習において、生徒が読みを深めていくうえで有効な、「比べ読み」の授業について研究する。

2. 研究の方法

まず、「比べ読み」授業を構想する。具体的には、(1)読みを深めるとはどういうことか、(2)どのような学習の手立てが必要か、の二点から考える。次に、授業実践の概要を述べ、それを踏まえて、授業実践の成果及びその考察を、生徒のワークシートの記述などを元に分析する。

3. 「比べ読み」授業の構想

(1)「読みを深める」とはどういうことか

古典学習においては、どのように読みを深めることが求められているのだろうか。新学習指導要領では、「読むこと」の学習過程として次の四つが示されている。

- (i) 「構造と内容の把握」：叙述を基に内容・構成・展開などを的確に捉える。
- (ii) 「精査・解釈①」：作品の中のものの見方、感じ方、考え方を捉えたり内容を解釈したりする。

(iii) 「精査・解釈②」：作品の成立背景や他作品などとの関係を踏まえ、解釈を深め、作品の価値を考察する。

(iv) 「考えの形成」：精査・解釈における理解に基づき、自分の既存の知識や様々な経験と結び付けて考えを広げたり深めたりする。

新指導要領解説には、指導の順序性はないとあるが、四つ目の「考えの形成」の内容を読みとる限り、その他の「構造と内容の把握」や「精査・解釈」の段階を適切に経てこそ、そうした「考えの形成」に至るような読みの深化につながっていくのではないかと理解できる。「読むこと」はこれらの過程を踏まえて、適切にその学習内容や言語活動を考えていくことが求められている。

本研究における、「読みを深める」とは、こうした読むことの過程を踏まえて、作品の内容を捉え、作品のものの見方・考え方・感じ方を読み取り、作品解釈を深めた上で、学習者が対象に対する考えを広げたり深めたりしていくことを指すこととする。そして、この読みを段階的に深めていくということを、生徒主体の探究的な学習の中で進めていきやすいのが、「比べ読み」である。

では、なぜ「比べ読み」は、主体的、段階的に読みを深めやすいのか、述べていきたい。下の図1は、「比べ読み」における読み深まりを示したものである。まず、〈a 教材選択〉で「元の作品」に対して「比べる作品」が選

択される。すると、二作品を相対化し、その共通点と相違点に目が行き、作品に即した精緻な〈b 分析整理〉が可能になる。その過程で、読み手の中に、比べたからこそ出てくる素朴な疑問、〈c 課題意識〉が生まれ、読み手はそれを解決しようと、何度も叙述を読み直しながら、〈d 意味づけ〉、つまり解釈をしていくことになる。そのとき、いくつかの複数の気づきを組み合わせ、関連付ける思考が働き、より深い抽象的な気づきが変わっていく。例えば、作品の底流にある思想や感情、作者の意図などへの気づきである。ここから作品の特徴を捉えられるようになり、〈e 作品認識〉が深まる。また作品に対する多面的・多角的な視点が生まれ、〈e 作品評価〉の視点も生まれる。そして、作品の登場人物や作者が対象をどう捉えるかなどを踏まえ、既存の知識や自身の経験と結びつけて、自らの考えをより広げたり深めたりする〈f 考えの形成〉に至ると考えている。

(2) どのような学習の手立てが必要か

しかし、教材選択さえすれば、生徒たちが勝手に読みを深めていくわけではない。昨年度の研究の成果から、特に、比べ読みに慣れていない生徒たちの場合、図2に示した、読みの学習過程を経ていくには、いくつかの手立てが必要になってくることが分かってきた。

図2の、〈a 教材選択〉、〈b 分析整理〉、〈c 課題意識〉について、授業者の留意点を挙げていく。



図1 「比べ読み」における読みの深まり（出所 筆者作成）

① 〈a 教材選択〉における留意点

比べる作品としては、関連性があり、相対化しやすい作品を選択する。具体的には、同じ題材を取り上げた作品や、異なる時代に成立した随筆や小説、物語などが考えられる。尚、その比べる作品は、その目的にもよるが、必ずしも古典作品でなくてもよいと考えている。選択する「比べる作品」によってその目的や効果が変わってくると思われるので、いくつか挙げてみる。例えば、

(i)元の古典作品に対して、生徒の生活実態において身近なもの（J-pop の歌詞等）を扱う教材選択は、古典への関心意欲を高めやすい。

(ii)元の古典作品と共通し、時代を超えて、人間・社会・自然等の普遍のテーマ（愛、別れ等）を扱う教材選択は、現代社会や自分と関わらせて読むことがしやすい。

(iii)元の古典作品に関連する、我が国の文化の底流にある思想（無常観、もののあはれ等）や感情を扱う教材選択は、古典特有の知識・理解を補うことにつながる。

(iv)元の古典作品と同じ題材で似通った構造の教材選択は、様々な観点から複数の相違点に気づくことができ、作品の特徴や解釈といった作品認識を深めるための思考が働きやすい。

今回は、「読みを深める」という研究主題に沿い、学習者の主体的な思考を促し、主体的に読みを深めさせる目的で、(iv)のような教材選択の視点を持って実践を行うこととする。内容や表現について、複数の共通点や相違点があると、それらを結び付け解釈しようとするため、より精緻な思考が働く。また他者との対話も、より論理的に行いやすいと考える。

② 〈b 分析整理〉における留意点

複数の作品を相対化し、それらを客観的・分析的に批評することで、表面上の気づきに留まらない、作品の特徴や作者の意図、また作品の底流にあるものの見方・感じ方・考え方といった深い意味合いことに気付くことができる。そのためには、共通点と相違点を、多面的・多角的に洗い出し、整理していく手間が必要である。

このときの、学習形態の工夫として、個の思考からグループの活動へとつなげた対話的学習を取り入れることが望ましい。理由として、以下が挙げられる。

(i)個の気づきをグループで共有することで、気づきを増やし、議論の土台を作ることができる。

(ii)言語化することで思考が整理される。

(iii)気づきを他者と共有し、叙述に基づいた読みの確認をすることができる。

対話的な学習の工夫のポイントとしては、最初は小さな気づきでもよいので、思いついたことを数多く挙げていけるやり方で、その後、グループ内で共有しやすいものがよい。

③ 〈c 課題意識〉における留意点

元の作品と比べる作品とを分析整理した上で、比べて見えてきた疑問（＝課題意識）を挙げさせる。元の作品の読みを深めさせる場合、元の作品に視点を戻して課題意識を持たせるようにする。このことにより、何に着眼して読みを深めるのかという取捨選択を行う中で、表面上の気づきがより抽象化されたり、学習者に主体性を持たせたりすることができる。

4. 授業実践の概要

実習校において、以下の要領で実践した。

実践授業の概要

授業時期：10月中旬～下旬

実習校：山梨県内の公立A高等学校

対象：第2学年A組40名、B組16名

授業の目標：『大鏡』『道真左遷』の作品の特徴や性質について『北野天神縁起』との「比べ読み」を通して理解を深めよう。

言語活動：「大鏡」と「北野天神縁起」の比べ読みをする。その後、生徒自身が「大鏡」の作者となつてあとがきを書く。

使用教材：教科書作品に対して、題材・構成等が共通で、和歌の配列や感情表現等に相違点がある縁起絵巻である「北野天神縁起」の道真の左遷の場面を比べる作品とした。

単元の計画は以下の通りである。

単元計画（全8時間）

【第1時】【導入】

「菅原道真」が我が国の言語文化の中で語り継がれてきたことを知る。

【第2時】【口語訳】

教科書作品の内容読解をする。

【第5・6時】【比べ読み】

比べ読みを通して、教科書作品「大鏡」の描き方の特徴や効果を読み取る。

【第7・8時】【まとめ】

大鏡のあとがきを書く活動で、作者の意図を表現する。

この授業は、〈a 教材選択〉について、比べる作品を選ぶ視点として、題材・構成等が共通で、和歌の配列や感情表現の描き方等に相違点があることで、具体的にその場や心情を想像しながら、それらを関連付けて意味付けが進み、徐々に作品の性質（ジャンル）や作者の意図というところに考えが焦点化していくと思われる作品を選んだ。

〈b 分析整理〉については、「相違点を書いた付箋を使って、それぞれの作品の特徴をつかもう。」と発問した。学習形態の工夫として、KJ法を取り入れ、相違点を個で挙げさせたあと、仲間と共有しながら気付きを増やし、グルーピングしながら観点を整理していくことができるようにした。まず、始めに個の気づきを赤い付箋で共有したあと、グループでの対話を通してグルーピングし、元の作品の側から特徴を捉えなおしたものを、青い付箋に書かせた。二作品の相違点を個の小さな気づきから、言葉が抽象化され、元の作品の特徴が表れてきた。

さらに〈c 課題意識〉として、KJ法の時と同じグループで、自分たちの課題意識をホワイトボードにまとめさせた。焦点化の手立てとして、「課題意識の中から、『なぜ大鏡は～なのか。』の形で問いを立ててみよう。そして、それに自分たちで答えよう。」と発問し、答えを考える中で、学習者が元の作品の特徴を捉え、作品認識を深めるよう狙った。

図2は、各班から出てきた問いの一部である。比べて見えてきた大鏡の特徴的な部分について問いを立て、これについてグループで話し合い、自分たちなりの答えをホワイトボードに書き、各班1分で全体に向けて発表をした。

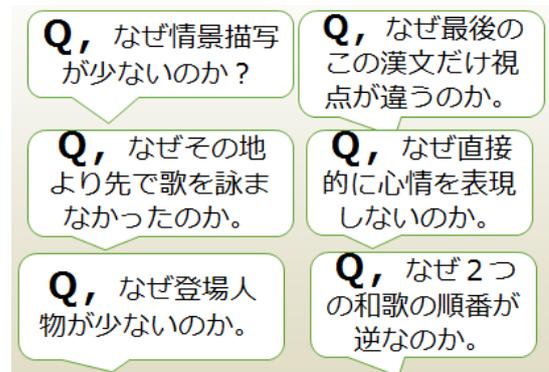


図2 各班の「なぜ大鏡は～なのか」の問い
(出所 筆者作成)

5. 授業実践の成果及びその考察

実際の授業における，生徒の反応やワークシートの記述を，読み深めの学習過程に沿って，〈d 意味付け〉〈e 作品認識・評価〉〈f 考えの形成〉の順に，分析していく。

(1) 〈d 意味付け〉に関係する成果と課題

① 成果として，「なぜ大鏡は～」という問いを作る中で，15 班中全ての班が，作品の叙述内容にとどまらず，元の教科書作品である「大鏡」の「作者の意図」について考えることができた。また，その答えを出す段階で，ほぼ全ての班が，中心人物の状況や和歌・漢詩の内容を把握した上で，複数の観点を合わせて，解釈を示していた。

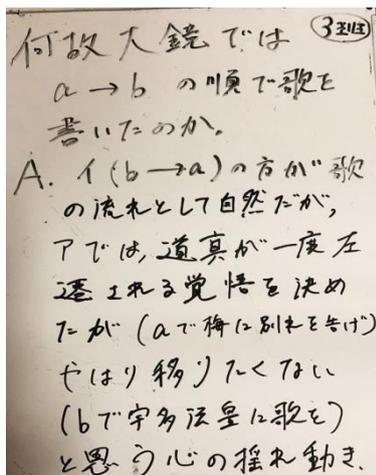


図3 自らの問いに答え，解釈を深めるある班のホワイトボード (出所 生徒作成)

例えば，図3のグループは，2つの和歌の配列が逆であるという，一つの相違点から深めた。そして，元の作品の方の作者は，中心人物の心の揺れ動きを表すように和歌を

意図的に並べているとの結論を出す段階で，和歌の詠まれた状況や和歌の内容，詠み手の意図等について考え合わせていることが分かる。その後の「作者のあとがきを書く」という言語活動の中でも，ある生徒が，「a の歌(梅の木に詠んだ歌)を先にすると，一度左遷を受け入れたが未練があって宇多法皇に左遷の取り消しを懇願しているようになる。(中略)悩んだが，道真が左遷することに対して心が

揺れ動いている方が読み手に面白く伝わると思い，その順番にした」と作者の意図について作者になりきって書き表しており，個としても対話的な学習を受けて，自分なりの解釈を持つことができたことが分かる。

②課題として，該当箇所の内容解釈が深まらなかった班が1班あった。他の班は，比べる作品との内容面の違い(道真の心情をどう描くか)に焦点を当てて描かれ方の特徴を考えていったが，この班は，表記と語りの設定という観点について考え，内容面と組み合わせながら意味づけていくことをしなかった。「比べる作品」の内容が似ている場合，内容以外の観点到に目が行ってしまい，内容面に立ち戻って吟味しないまま終わってしまうことがあることが分かる。

(2) 〈e 作品認識・評価〉に関係する成果と課題

①単元の最後の言語活動で，「大鏡」の作者になってあとがきを書くという言語活動をした。その中で，ほとんどの生徒が，大鏡のこの場面は「左遷の悲しみ」を深く描いたものだと認識しており，そのうち1/3が「歴史的な敗者」である道真ということ意識していた。

図4は，「大鏡」を「道真本人を中心に描くこと」で，「筆舌しがたい悲しみを表現」したものだとし，それは藤原氏の「輝かしい歴史の裏側」の「悲しい歴史」を記録したものだとして述べている。このように，「政界を追われる道

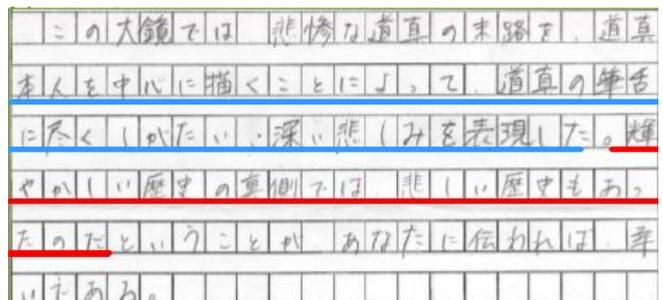


図4 大鏡の作者としてあとがきを書いた文章 (出所 生徒作成)

真」「完全な負け試合」といった言葉で、「大鏡」の文学史的な知識を、自らの読みとりと結びつけていった生徒が何人もいた。

一方で課題として、「左遷」の捉えが甘く、「悲しみ」の対象が「別れのつらさ」などのように読めるあいまいな記述や、「道真の心情が不明だから、詳細に書かないという描き方をした」といった、描き方と作者の意図を安易に結びつけた記述も見られた。比べる時に、文学史的な知識や作品内のテーマへの捉えが甘いと、作品から読み取ったことを、他の観点と結びつけていくことが難しい。考えさせる点を限定するために、「大鏡はなぜ、どのように「左遷」を描いたのか」など、焦点化させて発問をしても良かったと考える。

②また、「比べる作品」があると作品評価が進み、変容するという成果があった。ある班が、「大鏡」の方にだけ存在する漢詩について、これは本当に道真が作ったものなのか、話し合っていた。他の和歌などと違い、彼を見る視点が異なっている、この漢詩を作者が意図的に最後に持ってくることで、うまくまとめようとしていると、生徒達は感じたのだ。授業者が、ある書物には、道真の作ではなく別の者の言葉だと書いてあると話すと、探究の楽しさと充実感を覚えた様子が見られた。比べる作品があることで「大鏡」の「物語」としての虚構性が見えてくるのだと思う。その他、「比べ読み」直後の教室には、「この作品の方が～」という視点が自然に生まれ、最後

【生徒Aの記述】 最初はイ（比べる作品）の方が悲しみがよく表現されているなど感じたけど、読みこむとア（教科書）の方が深いと思った。

【生徒Bの記述】 よく考えるとア（教科書）の方が他の人の気持ちが書いていないで、道真は孤独のように思え、悲しいと思った。

図5 単元の最後の感想欄に見られた作品評価に関する生徒の記述（出所生徒作成）

の感想にも、図5のように、評価について書かれていた。

「比べ読み」により、始めから評価の視点を持って読むことができる。そのため読みを深めたあとに、読みが変容した場合、自らそれに気づくことができるということも分かった。

(3)〈f 考えの形成〉に関係する成果と課題

① 元の作品のあとがきを書く言語活動では、生徒の記述から、作品に登場する漢詩や和歌の解釈を踏まえて、中心人物の人生観について捉えていく記述が見られた。上記の【生徒Cの記述】では、自身の経験や価値観からくる性別観などに引きつけて考えている。

【生徒Cの記述】（中略）それは道真は男で私も男だからだ。もし仮に私が女ならば、道真左遷の始終を京から九州までの道中を、事細かに記していたことだろう。（中略）是れ春秋と覚悟を決めた男の背中にかける言葉があるだろうか、いや、ない。だから、播磨で語るのをやめたのは、これ以上は野暮だと思ったからだ。

また、【生徒Dの記述】では、作品内に流れる「無常観」を踏まえて、それを自分なりに広げて考えており、栄華の中にあってはこの世の真実が見えない人間の「世の理」と表している。古典作品を解釈する中で、感性や情緒を働かせ、自らの思いを深化させていると考えられる。

【生徒Dの記述】 またあるものは、自身を諦観するものだった。駅長に諭すように詠んだこの歌はきっと自分に詠んでいた。（中略）栄えた花ほど儂く散り、何事も衰える。花となっていた時に気付かず、散りゆく時になって世の理を気付く。このような自分に道真は自身への皮肉も込めたのかもしれない。

6. 考察

では、どのような「比べ読み」ならば読みが深まるのかという研究の目的について考えていきたい。今回は、読みの学習過程を意識し、それに沿った手立てを行ったことで読みが深まったと考える。比べ読みであっても、まず叙述に即して内容や構造を捉え、そこから課題意識を持って、読み深めることで、考えの形成に至り、読みの深化につながる。生徒たちが段階を経て、作品をより具体的にイメージし、自らの思考を働かせるように、教材選択、焦点化、対話的な学習、元の読みを深める言語活動の手立てを行っていくのがよいと思う。

また、読みの観点における複数の相違点を生徒たちが関連付け解釈していく「比べ読み」によって、探究的な学習ができ、主体的に読み深められる。内容面はもちろんそれ以外にもいくつもの気づきを持てる教材を与え、それを論理的に解釈させる場を設定することで、生徒たちは、主体的に楽しみながら、思考力・判断力・表現力を高めていくのである。

「比べ読み」のよさは、比べる作品との相違点から元の作品の特徴が掴みやすくなり、そのことで作品評価の視点も持ちやすくなることである。自己の読みの変容に気づき、自らの考えや思いが広がったり深まったりすることは、古典学習における関心意欲を高めることにつながるだろう。

ただ、「比べ読み」で読みが深まらず、読みの実感が得られなければ、作品内容の混乱や消化不良、意欲の低下を招くことにもなる。だから、授業者は、何のために作品のどこを比べ、どの範囲で考えさせ、どう評価するのかという視点を事前に持つておかなければならないと考える。一方で、今後の課題として、焦点化、つまり発問の妥当性を研究していくことが必要である。また、生徒たちが解釈のために複数の観点を関連付けていく時に、教

員の手立てはどうあればよいかについても、研究が進んでいくとよいと思う。

このように、「比べ読み」授業における研究課題は多々残されている。しかしそれでも「比べ読み」への期待はなお大きいと思われる。例えば、「比べ読み」による読みの深化、また生徒たちがその実感を得られること、さらに、「比べ読み」で高められる「思考力」を始めとする様々な資質・能力など、これらに対して非常に有効だと考えられるからである。

7. 引用文献

沖奈保子(2018)「第2章「資質・能力」を育てる授業プラン」.大滝一登・高木展郎.『新学習指導要領対応 高校の国語授業はこう変わる』.三省堂

川上弘宜(2009)『比べ読み・重ね読み』で「一人読み」.明治図書.

船津啓治(2010)『比べ読みの可能性とその方法』.溪水社.

文部科学省(2016)「幼稚園、小学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(中教審第197号)

文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領解説 国語編」(平成30年3月告示)